

蔦屋重三郎関係年譜

年	年齢	事 項
寛延3年(1750)	1歳	1月7日、江戸新吉原(東京都台東区)にて出生。父は丸山重助、母は広瀬津与。名は柯理(からまる。重三郎は通称)
宝暦6年(1756)	7歳	実母と別離
年 不 明		新吉原の喜多川氏蔦屋の養子となる
宝暦8年(1758)	9歳	12月、松平定信が出生する
10年(1760)	11歳	9月、徳川家治が10代将軍となる
11年(1761)	12歳	6月、9代将軍徳川家重が死去
明和4年(1767)	18歳	7月、田沼意次が側用人になる
安永元年(1772)	23歳	1月、田沼意次が老中になる(側用人と兼任)
3年(1774)	25歳	9月、南鐐二朱銀を新鑄される 1月、鱗形屋孫兵衛板春細見『細見嗚呼御江戸』に改訂所として関わる 7月、初の蔦屋重三郎板『一目千本』(吉原遊女の評判記)を刊行 8月、杉田玄白・前野良沢・桂川甫周『解体新書』が刊行される
4年(1775)	26歳	7月、蔦屋重三郎板初となる吉原細見『籬の花』を刊行 恋川春町『金々先生栄花夢』が刊行される(黄表紙の祖)
6年(1777)	28歳	新吉原大門口五十間道に独立店舗(「耕書堂」)を構える(それ以前は店を借りて営業)。朋誠堂喜三二などの当世戯作の出版を手掛けだす 4月、上田秋成『雨月物語』の刊行が開始される 11月、平賀源内がエレキテルを完成させる
8年(1779)	30歳	富本浄瑠璃稽古本の出版を手掛ける
9年(1780)	31歳	黄表紙・往来物の出版を開始
天明元年(1781)	32歳	黄表紙評判記に自板の草双紙が評価され、評判記編者の大田南畝を初訪問(以降、親密な交友が始まる)
2年(1782)	33歳	冷害などで天明の飢饉が始まる 12月、大田南畝・恋川春町・朱楽菅江らを新吉原大文字屋へ招待
3年(1783)	34歳	吉原細見に関して、株をすべて掌握し蔦屋重三郎の独占出版となる 1月、工藤平助『赤蝦夷風説考』、大田南畝・朱楽菅江『万載狂歌集』が刊行される 3月、大田南畝母の六十賀会が開かれ、祝賀の歌文集『狂文狂

年	年齢	事 項
年 不 明		歌老菜子』を翌年に刊行
天明4年(1784)	35歳	7月, 浅間山大噴火 9月, 通油町(東京都中央区日本橋大伝馬町)に店を構え本拠を移す(大門口の店は, 蔦屋徳二郎名義として存続) 11月, 田沼意知が若年寄となる 実父母を迎え養う
5年(1785)	36歳	3月, 旗本の佐野政言が若年寄の田沼意知(36歳)を刃傷し殺害 山東京伝『江戸生艶気樺焼』(黄表紙)が刊行される。林子平が『三国通覧図説』を著す
6年(1786)	37歳	2月, 幕府が山口鉄五郎らを蝦夷地調査に派遣(最上徳内も参加) 林子平が『海国兵談』を記す
7年(1787)	38歳	5月, 北尾重政画『絵本八十字治川』『絵本吾妻挾』, 喜多川歌麿画『絵本江戸爵』の3点を刊行 7月, 利根川が氾濫し江戸洪水 8月, 10代将軍徳川家治が死去。田沼意次が老中を辞職(10月に幕府より処罰される) 11月, 『狂歌才蔵集』撰集のための狂歌会開催
8年(1788)	39歳	4月, 徳川家斉が11代将軍となる 6月, 松平定信が老中に就任(寛政の改革開始)
寛政元年(1789)	40歳	朋誠堂喜三『文武二道万石通』(黄表紙)が刊行される 7月, 田沼意次(70歳)が死去
2年(1790)	41歳	正月, 黄表紙『鸚鵡返文武二道』(蔦屋重三郎刊)の件で, 作者の恋川春町が松平定信より出頭を命じられるも, 病気を理由に応じず 7月, 恋川春町(46歳)が死去
3年(1791)	42歳	5月, 書物・草紙板行についての規制強化を促す町触れが出される。異学の禁が出される 9月, 書物・草紙板行についての町触れが再度出される 11月, 地本草紙問屋仲間の自主検閲組織確立を盛り込んだ申し渡しりがなされる 山東京伝作の洒落本『娼妓絹麗』『仕懸文庫』『錦之裏』を刊行 3月, 『娼妓絹麗』『仕懸文庫』『錦之裏』出板の件で町奉行より出頭を命じられ, 三作の絶板と身上半減の刑を受ける。作者の山東京伝は手鎖50日の処分を受ける

年	年齢	事 項
寛政4年(1792)	43歳	山東京伝の紹介で、曲亭(滝沢)馬琴を手代として抱える 9月、ロシア使節のラクスマンが根室に来航
5年(1793)	44歳	10月、実母が死去。山谷正法寺(東京都台東区東浅草)に葬る 喜多川歌麿筆の美人画出版を手掛けだす 2月、実母の墓碑銘撰文を大田南畝に依頼 7月、曲亭(滝沢)馬琴が店を辞去
6年(1794)	45歳	十返舎一九が店の食客となる 5月、東洲斎写楽筆の役者絵28枚を皮切りに、翌年正月にかけて140点余の出版を手掛ける
7年(1795)	46歳	3月、伊勢松坂に本居宣長を訪問
9年(1797)	48歳	1月、自作の黄表紙『身体開帳略縁起』を刊行 5月6日、脚気により死去(享年48)。山谷正法寺(東京都台東区東浅草)に葬られる。番頭勇助が養子となり、2代目蔦屋重三郎となる